『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』における初期密教の特徴
—ウパセーナ比丘説話を中心として—

大　塚　伸　夫

はじめに

『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』（大正 No.1043、以下、本経を呼ぶ場合『請観音陀羅尼経』と略称）は、対応する梵本とチベット訳は報告されておらず、漢訳のみである。本経は、『大正蔵経』では東晋竺難提訳とされるが、そもそも『出三蔵記集』には失訳本とみなされている(1)。本経の訳者が竺難提とみなされたのは、第二録の『衆経目録（法経録）』（A.D.594）に「請観世音消伏毒害陀羅尼経一巻（宋世外国舶主竺難提訳）(2)」とあることに始まる。『開元録』では、竺難提によって東晋恭帝の元熙元年（A.D. 419）に訳出されたと記されている(3)。『開元録』にも承認されているため、現時点では本経の竺難提訳を認め、訳出年代を A.D. 419としたい。この漢訳年代より、インドにおける本経の成立を推測すれば、四世紀中葉ころまで遡ることが可能であろう。したがって、本経は、浄土経典の強い影響が認められ、弥陀三尊形式の観音を説く曇無竭訳『観世音菩薩授記経』（A.D. 453）との前後関係はともかくとして、観音系密教経典としては、最も早期に成立し、十一面観音や不空羂索観音など多くの変化観音系密教経典の先駆に位置づけることができる。

先行研究では、概ね本経が密教系観音経典の祖型とみなされる点で一致している。たとえば、近年の代表的なものに佐和（1950、pp.108-110）や山田（1976ab）などがあるが、とくに山田（1976a）では、『法華経』普門品系と『無量寿経』系の両観音信仰を統合した形で『請観音陀羅尼経』が成立し、本経の影響で『不空羂索呪経』が成立し、同経の構成・形式・表現を借用して『十一面観音呪経』が成立したとみている。一方、添田（1931ab）や佐和（1943）によれば、『十一面観世音神呪経』より『不空羂索呪経』が展開したとみているようなので、本経以降の密教系観音経典の展開を考える時、未解決の問題が残るが、本経が、のちに展開する変化観音系密教経典の先駆をなすものであることについては、成立年代からして妥当といえるで

あろう。

およそ、本経の内容構成は、以下に列挙する四種のストーリーによって構成されている。

Ⅰヴァイシャーリー治病説話に基づくストーリー（§1〜12、大正 vol.20, 34b11-35a19）

ヴァイシャーリー城で疫病が流行し、住民の懇請を受けた釈尊が、観音に基づく救済法（帰命句・祈願偈・呪文の誦持）を教示するのが中心内容。（『根本有部薬事』所説のヴァイシャーリー治病説話より摂取・改変）

Ⅱ観音による諸難救済に基づくストーリー（§13〜17、大正 vol.20, 35a20-c8）

観音の称名と呪文誦持による二十種功徳と四種無畏を明かすのが中心内容。（この内容が『十一面観世音神呪経』や『不空羂索呪経』に継承）

Ⅲ六字神呪に基づくストーリー（§18〜21、大正 vol.20, 35c8-36b27）

悪鬼「旃陀利（Caṇḍālī）」に悩害された女人を救済する六字神呪と、その功徳を明かすのが中心内容。（『摩登伽経』と『Divyāvadāna』Śārdūlakarṇāvadāna 所説の六字明呪と密接に関連）

Ⅳウパセーナ比丘説話に基づくストーリー（§22〜33、大正 vol.20, 36b28-38a19）

ウパセーナ比丘を涅槃へと導いた修行法、五門禅と呪文を明かすのが中心内容。

本稿では、上掲したうちの最後、〈Ⅳウパセーナ比丘説話に基づくストーリー〉を取り上げ、成立問題をも視野に入れながら、そこに見られる本経の密教的な特徴を浮き彫りにしてみたい。

(1) 本経のウパセーナ比丘説話の概要と導入目的について

それでは、〈Ⅳウパセーナ比丘説話に基づくストーリー〉のモデルになった典籍はどのようなものかを探ってみたい。その場合、本経におけるストーリーを押さえておく必要があるので、以下にその概要を列挙する。（§22以下の説段は、Ⅰ〜Ⅳのストーリーを踏まえて付けた小科段を意味する。）

§22優波斯那比丘の事跡解説（大正 vol.20, 36b28-c6）

釈尊が阿難に対して、無量の功徳が得られるという(c)大吉祥六字章句救苦神呪の存在を説く。そして、かつて王舎城の寒林に住していた優波斯那（Upasena）比丘の事跡を語り始める。すなわち、同比丘には過去に犯し

た悪行殺生が無量にあったが、観世音菩薩の(c)呪文を聞き、正念観心（以下の数息観）することによって、観世音菩薩を拝見して、解脱し、阿羅漢になったとする、(c)呪文に関する因縁譚を明かす。

§23優波斯那比丘による見仏法（大正 vol.20, 36c6-16）

そこで、釈尊は、優波斯那比丘がどのようにして観世音菩薩や十方仏を見仏できたのか、その見仏法を説き始める。まず、見仏したいならば、①心身を整える。②左手を右手の上に置く。③舌を上顎につけて調息するに、④十を数える息念を心根が明浄となるまで繰り返すなどの実践法、すなわち数息観の行法を解説する。

§24数息観による行果の教示（大正 vol.20, 36c16-19）

次に、釈尊は諸比丘に向って、この(c)呪文と、この数息観とによれば、はやく観世音菩薩および十方仏を拝見することができると説く。

§25釈尊による「五門禅」の教示（大正 vol.20, 36c19-25）

次に、釈尊は諸比丘に向って、甘露の無上法味を服したいなら、出家者は苦・空・無常・敗壊・不久磨滅を観ずる「五門禅[4]」を修し、自身を観ぜよと教示する。頭より足にいたる関節を念じてみな芭蕉のごとくであり、内外ともに空であると観じ、色受想行識もまた、そのように観ずべきことを教示する。

§26優波斯那比丘の入涅槃（大正 vol.20, 36c25-37a16）

そこに、舎利弗が登場し、釈尊の意を理解して、この五門禅の三昧に入り、無数の人に菩提心を発させる。その時、優波斯那比丘が立ち上がり、舎利弗に礼拝して、この三昧について解説を請う。続けて、眼・眼識・色、耳・耳識・声、鼻・鼻識・香、舌・舌識・味、意・意識・攀縁、諸顛倒・想・顛倒、色声香味触・細滑[5]が、それぞれ相応してどのように摂住するのかと問い、識は賊にして猿猴のように走り、六根を遊戯し、諸法を遍縁してどのように摂住するのかと尋ねる。それに対して、舎利弗が同比丘に答えて、四大の不実を説き、仮に因縁して色受想行識が生ずるのであり、一々の性相は水火風などと同じで、みな如実際に入ると説く。その時、優波斯那比丘はこれを聞いて、身は水火の如しと四大定を得て、五蘊が空にして無所有であると通達し、結賊を除いて阿羅漢を得て、身中より火を出して自ら身を砕き般涅槃に入った。そこで、舎利弗が優波斯那の舎利を塔に收め、起塔した。

§27舎利弗による釈尊所説の禅定への称賛（大正 vol.20, 37a16-23）

次に、舎利弗は、釈尊の説く禅定が第一で、これを修せば身は瑠璃のようになり、毛孔に見仏する。十二因縁を観ずれば、一々の性相は不実で、空・谷響・芭蕉の如く堅実なく、野馬行などの如しと、十二因縁を諦観して縁覚道を成就するものであると述べる。あるいは瑠璃三昧に入定して、見仏・発菩提心・不退転に住すると述べる。

§28観音の称名と(c)呪文と数息観の実修による功徳（大正 vol.20, 37a23-b5）

釈尊は舎利弗に対して、優波斯那比丘のように、善男子善女人が観世音菩薩の名号と、(c)呪文と、数息観の法を修するなら、1.無数劫に造りし悪業を除き悪業障を破し、2.現身に無量の諸仏を拝見し、3.妙法を聞き、4.三種の菩提心を発すと説く。また、もし宿世の罪業の因縁があり、現に極重の悪行を作ったとしても、夢中に観世音菩薩を見れば、5.猛風が厚い雲を四散させるように重罪と悪業から離れ、6.諸仏の前に生ずることができると説く。

§29釈尊による偈文と(d)灌頂吉祥陀羅尼の説示（大正 vol.20, 37b5-c24）

次に、釈尊は観世音菩薩の名号と呪文を受持する者のために、四大龍王による守護を始めとする偈文と、(d)灌頂吉祥陀羅尼を説く。

§30釈尊による(d)呪文の功徳教示（大正 vol.20, 37c25-26）

釈尊が舎利弗に、(d)呪文の功徳を説く。すなわち、同陀羅尼を聞き、受持し読誦するならば、1.悪業障を破し、2.横死することはないと説く。

§31舎利弗による(d)呪文解説の懇請（大正 vol.20, 37c26-38a2）

そこで、舎利弗が釈尊に、この(d)呪文は大吉祥句であり、一切の無所畏を施すものであるが、釈尊が過去にいかなる仏よりこの(d)呪文を聞いたのかを尋ねる。舎利弗は重ねて、未来世の者が1.大安楽を得、2.横死を免れ、3.刀・4.杖・5.毒薬・6.水・7.火・8.盗賊の被害を受けないためにも、釈尊に解説してくれるよう懇請する。

§32釈尊による首楞厳三昧入住の功徳説示（大正 vol.20, 38a2-7）

舎利弗の懇請に応えた釈尊は、とくに八十万劫の過去に「一切世間勝」と名づける仏がいて、彼の仏が釈尊に(d)呪文を演説してくれたと答える。そして、数息して心を散じないようにしたら、1.結使は消え、2.無生法忍を得て、3.「首楞厳三昧」に住したと説く。

§33釈尊による経典受持の功徳説示（大正 vol.20, 38a7-19）

もし、善男子善女人がこの経典を聞き、受持・読誦・書写・解説するなら、1.無量阿僧祇劫の生死の罪を超越し、2.毒害は消え、3.災いに遭うことはないと説く。釈尊が以上のことを説き終えると、五百人の長者子が無生法忍を得て、無数の人天が菩提心を発したという。舎利弗や阿難らは、釈尊にこの「観仏三昧海」にして「請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪」が一切の吉祥へ到らせるもので、梵天衆が敬うものであると申し上げる。そこで、釈尊は阿難に、汝の述べるとおりであるとして、善男子善女人がもしこの経題の名を聞くならば、常に仏菩薩を見仏し、浄仏国に生ずることができると説くと、八十億の天子・天女・龍・鬼神が発菩提心したという。舎利弗や阿難らは釈尊の所説を聞き終えると、礼仏して退いて、本経が終了する。

ここで、注目すべきは、§22～26にいたるウパセーナ（Upasena）比丘の説話が、いかなる目的で本経に摂取されたかである。まず、§22では、過去に悪行殺生をなしたウパセーナであったが（自説往昔作諸悪行殺生無量）、前段に示された観音の(c)呪文を誦持したことによって、阿羅漢になり得た因縁譚が明かされる（聞觀世音菩薩六字章句正念思惟觀心心脈使想一處見觀世音菩薩即得解脱成阿羅漢。大正 vol.20, 36c3-6）。そして、§23～25では数息観と五門禅という修行方法が詳説され、§26では、そのとおり修行したウパセーナが、最後に般涅槃に入る旨が明かされている（時優波斯那聞是語已。身如水火得四大定。通達五陰空無所有。殺諸結賊豁然意解。得阿羅漢身中出火。即自碎身入般涅槃。大正 vol.20, 37a12-15）。全体的にみれば、§22において、(c)呪文によって実際に阿羅漢となったウパセーナ比丘の例話をあげて、(c)呪文の功徳の確実性を演出しているといえる。そして§23～25では、(c)呪文以外の具体的な修行方法である数息観と五門禅を挙げ、それを修したウパセーナが、§26において涅槃を実現したことを示しているので、このウパセーナ比丘の説話を導入する目的は、本経の説く呪文と併せて、数息観と五門禅によって修行すれば、たとえ過去において悪行殺生した者であっても、ウパセーナ比丘のように、その業報を受けることなく、阿羅漢となり般涅槃できることを強調するところにあったといえる。

(2) 本経のウパセーナ比丘説話のモデルについて

次に、本経の特徴と背景を考察する上で重要なのが、(c)呪文の功徳保証に採用されたウパセーナ比丘説話が、いかなる典籍をモデルに摂取されたかである。同説話

は『孔雀経』における吉祥比丘の蛇毒被害説話のモデルにもなっていたことは、すでに論究したところである[6]。とくに初期密教時代の中盤に属する僧伽婆羅訳『孔雀経』の場合、梵本『根本有部薬事』より摂取されたのである。本経の場合も、このウパセーナ比丘説話がモデルになっていることは、本経の成立基盤を考える上で非常に重要になってくる。

そこで、本経に関わる「ウパセーナ」と名のる比丘説話を探ると、古くは『Saṃyutta-nikāya』中の「Upasena」に見られる。また漢訳仏典では、本経のように「優波斯那」とか、「優波先那」「優婆斯」などと音写されたり、「小軍」「近将」「随勇」などと漢訳されて、『雑阿含経』、『賢愚経』、『根本説一切有部毘奈耶』、『根本説一切有部毘奈耶薬事』、『随勇尊者経』などに伝承されている[7]。ただし、『随勇尊者経』は宋の施護訳ゆえ、本経より後代の成立と考えられるゆえ、本経成立の背景からは除外したい。

以下に、本経に関わるウパセーナ比丘説話を伝承する各典籍の概略を提示するが、この説話自体も増広・改変されているので、①～⑥（ウパセーナ比丘説話の原形）、❼～⓬（同説話の続編）、ⓐ～ⓒ（同説話の因縁譚）の番号をもって、説話の大筋を紹介したい。

- 『Upasena』（Saṃyutta-nikāya, partIV, Migajāla-vagga, No.69, pp.40-41=南伝 vol.15, pp.64-66）

  ①王舎城（Rājagaha）の寒林（Sītavana）にある蛇頭岩窟（Sappasoṇḍikapabbhāra）中で、舎利弗とウパセーナがともに修行していた。②ある時、ウパセーナの身上に毒蛇が堕ちて咬まれる。③そこで、ウパセーナが舎利弗に自身の体が粉々に砕けるので、外に出すよう要請する。④しかし、ウパセーナの身体に何の異変も起こらないのを不思議に思った舎利弗がウパセーナに質問する。⑤すると、ウパセーナが六根に対する分別を離れ、我見（ahamkāra）・我所見（mamaṃkāra）・憍慢（māna）・随眠（anusaya）を根絶しているから、身体に異変が起こらないと説明する。⑥その後、舎利弗はウパセーナを岩窟の外へ運び出すと、ウパセーナの身体が粉々になり散失する。

  したがって、内容的には、上述した①～⑥のみで、これがウパセーナ比丘説話の原形となる。

- 『賢愚経』巻第十「優婆斯兄所殺品」第三十九（大正 vol.4, 417b10-418a5）

  毒蛇によって亡くなったウパセーナの因縁譚ⓐⓑが中心で、上の①～⑥以前の過去物語が明かされる。まず、毒蛇はウパセーナの兄の生まれ変わりで、

毒蛇とウパセーナはかつての兄弟であったという設定から始まる。

ⓐ王舎城に商人の兄弟がおり、兄が商用で他国へ出かけて音信不通の間に、弟のウパセーナが兄の恋する長者の娘を妊娠させてしまう。兄が戻ってきたことを知ったウパセーナが兄の恨みを恐れて、友人に堕胎を依頼し、自身は舎衛城の釈尊のもとへ出家すべく逃走する。兄は弟を恨んで殺害しようと舎衛城まで追いかけ、懸賞金をかけてまで殺害しようとするが、弟が殺されることなく、兄自身が弓矢に倒れる結果となる。兄が死後、毒蛇に生まれ変わった時、阿羅漢を得たウパセーナを死に至らせる（①～⑥）。そこで、ⓑ舎利弗は阿羅漢まで到達した彼が何故、このような結果になったのか疑問に思い、釈尊に質問する。釈尊は答えて、ウパセーナの過去世の因縁譚として、かつて猟師であったウパセーナが、ある辟支仏のせいで獲物が捕れなくなったことを逆恨みし、毒矢をもって辟支仏を死に至らしめた過去を説く。その因縁ゆえに、その業力で阿羅漢になった今世でも、ウパセーナが毒害を受けたとする因縁譚を明かす。

したがって、内容的には、ⓐ、①～⑥の概略、ⓑの順序で、ウパセーナ比丘説話の因縁譚が増広される。（ただし、説話の時代設定順からすれば、ⓑ→ⓐ→①～⑥となる）

・『雑阿含経』第二五二経（大正 vol.2, 60c14-61b）

①王舎城の寒林中、蛇頭岩窟下の迦陵伽行處に、ウパセーナが一人で修行していた。②ある時、毒蛇がウパセーナの身上に落ちて身体に毒が回った。③ウパセーナは近くにいる者たちに、自身の体が粉々に砕けるので、外に出すよう要請する。④その時、近くの樹下にいた舎利弗がウパセーナの声を聞き近づいて、同比丘の相貌や諸根に異常がないのに何故身体を運び出すのかと質問する。⑤すると、ウパセーナが<u>六根・六境・六大・五蘊に対する我我所を離れている</u>から、身体に異変が起こらないと説明する。⑥その後、舎利弗はウパセーナを岩窟の外へ運び出すと、彼の身体が粉々になる。❼そこで、舎利弗はウパセーナを讃嘆する偈文を述べて、ウパセーナが<u>梵行と八聖道の修行によって</u>、我我所と執着を離れた境地に到達して、相続することはない（久殖諸梵行　善修八聖道～不復更求餘　餘亦不相續）と宣言する。❽舎利弗はその後、ウパセーナを供養する。❾次いで、舎利弗は釈尊のもとを訪れて、ウパセーナの身に起こった状況を報告する。❿すると、釈尊が舎利弗に偈文（常慈念於彼　堅固頼吒羅～佛破一切毒　汝蛇毒今破）と呪術章句（塢溽婆隷～塢娛隷

悉波呵）を宣説し、この偈文と呪文を誦持する者は蛇毒が不能となり、身体は砕けることはないと説く。⓫そこで、舎利弗が、ウパセーナはこの偈文と呪文を聞いていなかったと述べる。⓬舎利弗は、今日、釈尊が来世の者のために、その偈文と呪文を説いてくれたと歓喜し、その場を去ったところで、この説話が終了する。

したがって、内容的には①～⑥、❼～⓬となるので、ここではウパセーナ比丘説話の続編（❼～⓬）が増広されている。

- 『根本説一切有部毘奈耶』巻第六「断人命学処」第三（大正 vol.23, 654b29-658b2）

まず、『賢愚経』に説かれるのと同一骨子で、ウパセーナ兄弟の因縁譚ⓐをより詳しく明かす（654b29-656c8）。次いで、ウパセーナが蛇に咬まれて涅槃に入るまでの本筋を明かす（①～⑥、656c8-657a1）。その後、舎利弗の報告を受けた釈尊が毒蛇除けの偈文と呪文を明かす（❼～❿、657a2-b22）。その時、ⓑ疑問に思った諸比丘たちが釈尊に、なぜウパセーナ比丘が蛇によって死に至ったのかと質問する。これより、ウパセーナの過去世の因縁譚が明かされる。それは、『賢愚経』に説かれるのと同一骨子の猟師と独覚の因縁譚であるが（657b23-658b2）、ここでは、涅槃した独覚を供養するため、猟師（ウパセーナ）が舎利塔を建立する旨が記されている。この点は、本経との関係を考える上で重要である。

したがって、内容的には、ⓐ、①～⑥、❼～⓬、ⓑとなり、ウパセーナ比丘説話をめぐる因縁譚も含めて、最も詳細に説かれる。（ただし、説話の時代設定順からすれば、ⓑ→ⓐ→①～⑥→❼～⓬となる）

- 『根本説一切有部毘奈耶薬事』巻十七「諸大弟子説本業報縁」（大正 vol.24,88c3-89a24、対応梵本はこの部分が欠落）

総偈文によって、ウパセーナ比丘が自身の業報を説く文脈で、ⓑかつて猟師であった過去世に弓矢で独覚の命を奪った説話を説く（88c3-16）。次いで、ⓒその悪業の報いで、数々の輪廻の中で地獄の苦しみを受けるも、人間として生まれたおり、独覚へ供養した善業功徳によって、釈尊のもとで出家し、阿羅漢となり六神通を具なえ、煩悩を断除した経緯を明かす（88c17-89a17）。その後、①～⑥山窟に入って命終せんとする時、毒蛇が身上に落ちて、ついに涅槃に至るまでの内容を明かす（89a18-24）。

したがって、内容的には、ⓐ（ウパセーナ兄弟の因縁説話）を欠く代わりに、ⓒという新たな文脈を構想して、ⓑ～ⓒといったウパセーナの過去世より阿

羅漢を得るまでの経緯を明かすところに特徴がある。その後、①～⑥までのウパセーナ比丘の説話本来の内容が示される。（説話の時代設定順からすれば、ⓑ→ⓒ→①～⑥となる）

上掲した各典籍の内容を比較してみると、この説話には二系統の増広・改変ルートがあるように思える。たとえば、

・第一『Upasena』→『賢愚経』ルート。これは、同説話の原形①～⑥（『Upasena』）を踏まえた上で、過去の因縁譚ⓐⓑ（『賢愚経』）を増広させていったルートである。

・第二『Upasena』→『雑阿含経』+『賢愚経』→『根本毘奈耶』→『薬事』ルート。これは、同説話の原形①～⑥（『Upasena』）に、❼～⓬（『雑阿含経』）を付加し、その前後にⓐⓑ（『賢愚経』）の因縁譚を挿入して、説話自体の全ストーリー（『根本毘奈耶』）を完成させるも、再びⓐの代わりに新たなⓒ因縁譚（『薬事』）を付加して、同説話を改変したルートである。

ここまでで、ウパセーナ比丘をめぐる説話がどのように増広され、改変されていったかが少分なりとも明らかになった。次なる作業は、本経のウパセーナ比丘の説話が、上記のどの典籍をモデルにしたかを具体的にみていきたい。まず、本経のウパセーナ比丘をめぐる説話は、以下のように展開している。

―『請観音陀羅尼経』のウパセーナ比丘説話の骨子―

1．ウパセーナは、過去に悪行殺生をなしたが、王舎城の寒林で比丘として難行苦行し、(c)呪文を聞き、正念観心（数息観・五門禅）した結果、観世音菩薩を拝見して、解脱し、阿羅漢になったという、同比丘の全体的な説話が示される。（§22）

2．数息観の調息法と、苦・空・無常・敗壊・不久磨滅を観ずる五門禅なる三昧法が提示される。（§23～26）

3．そこで、舎利弗が五門禅の三昧に入り、無数の人に菩提心を発させる。（§26）

4．すると、ウパセーナが舎利弗に、五門禅の三昧法を質問する。（§26）

5．舎利弗がウパセーナに、六根・六境・六識の十八界の空と、四大定と五蘊の空を観想する三昧法を教示する。（§26）

6．ウパセーナがそれを聞いて修した後、結賊（煩悩）を除き阿羅漢を得て、身中より火を出して、自ら身を砕き般涅槃に入った。（§26）

7．舎利弗がウパセーナの舎利を塔に収め、起塔した。（§26）

8．舎利弗が釈尊に、この三昧は十二因縁を諦観して縁覚道を成就するし、瑠

璃三昧に入定して、見仏・発菩提心・不退転に住するものであると述べる。（§27）

9．釈尊は舎利弗に対して、ウパセーナのように釈尊の説いた(c)呪文と数息定法を聞けば、無数億の悪を破して、阿羅漢となり、五分法身を具なえ、身に水火を出し、身を砕き滅度して、無数の人々に善心を発させると説く。（§28）

10. 釈尊は舎利弗に、観世音菩薩の名号と、(c)呪文と、数息観の法を実践する功徳を説く。（§28）

11. 釈尊は、観世音菩薩の名号と呪文を受持する者のために、四大龍王による守護を始めとする偈文を説く。（§29）

12. 次いで、釈尊は観世音菩薩の名号を受持する者のために、(d)灌頂吉祥陀羅尼を説く。（§29）

13. 釈尊は、(d)呪文の功徳として、悪業障を破し、横死することはないと説く。（§30）

14. 舎利弗が釈尊に、(d)呪文の解説を懇請する。（§31）

15. 釈尊がそれに応えて、首楞厳三昧入住の功徳を説示する。（§32）

16. 最後に、釈尊が経典受持の功徳を説示する。（§33）

上記の1.を見ると、本経の説くウパセーナ比丘は、過去に悪行殺生をなしたが、王舎城の寒林にて、比丘として難行苦行した設定になっている。この点は、過去の因縁譚である⒜堕胎と⒝辟支仏（独覚）殺生を犯すも、王舎城の寒林にて修行に励む姿を描写する『賢愚経』『根本有部毘奈耶』、ならびに⒜堕胎を説く『根本有部薬事』に対応する。しかし、(c)呪文を聞き、正念観心した結果、観世音菩薩を拝見して、解脱し、阿羅漢になったという本経の内容は、どの典籍にも対応しない。これは、本経が観音経典であるがゆえの創作であり、本経成立の際に新たに挿入された部分といえよう。また、この内容こそが、本経の想定したウパセーナ比丘の修行方法であるゆえ、原形ストーリー①の修行内容に対応しよう。

次に、本経の2.～5.における具体的な数息観と五門禅の三昧法に関してである。直接には『Upasena』より『根本有部薬事』にいたる五典籍すべてに、この二種の修行名は見られない。ただ『雑阿含経』に、梵行と八聖道を修した設定になっているのみである。とはいえ、『Upasena』『雑阿含経』『根本有部毘奈耶』『根本有部薬事』に見られる⑤の内容、すなわちウパセーナが六根に対する分別を離れて、我見（ahaṃkāra）・我所見（mamaṃkāra）・憍慢（māna）・随眠（anusaya）をよく根絶し

ているとする、ウパセーナ比丘が到達した無分別の境地に関しては、本経の数息観と五門禅の境地に対応すると思われる。とくに『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』所説の六根・六境・六大・五蘊などの法空を観ずるウパセーナの三昧の境地は、本経の五門禅を詳説する5.の内容とよく対応する。この点に関しては、本経の五門禅の背景を考察するところで詳しく検討してみたい。

次に、本経の6.～7.におけるウパセーナの涅槃と、舎利弗による起塔の文脈についてである。『Upasena』では、同比丘の入涅槃について、①～⑥の全体にわたって、ウパセーナが涅槃に入るどころか、阿羅漢との設定にすらなっていない。『賢愚経』では、ウパセーナが阿羅漢の設定になってはいるものの、入涅槃とは記述されていない。一方『雑阿含経』では、すでに⑤と❼～❽にそのニュアンスを示す内容が含まれているし、『根本有部毘奈耶』では、『雑阿含経』と同一内容を説くも、❼～❽中に涅槃に入った旨が確認できる（爾時小軍既涅槃已、大正 vol.23, 657a13)。『根本有部薬事』でも涅槃に入ったとする内容が確認される（⑥「此時我歸寂　是爲證涅槃」大正 vol.24, 89a20)。また、本経におけるウパセーナの起塔供養7.に関しては、いずれの典籍にも見られないが、唯一、『根本有部毘奈耶』には、涅槃に入った独覚を供養するため、猟師（ウパセーナ）が舎利塔を建立する旨が記されている。このような諸点を考え合わせると、本経6.～7.におけるウパセーナの涅槃と、舎利弗による起塔の文脈は、『根本有部毘奈耶』に対応する。

次に、本経の8.～13.に見られる、ウパセーナをめぐる釈尊と舎利弗の会話の中で、偈文と呪文が説かれる文脈についてである。そもそも、このような会話が行われるのは、『Upasena』『賢愚経』『根本有部薬事』にはなく、『雑阿含経』『根本有部毘奈耶』に限って、❾～❿の中にみられる。そのうえ、上記の二典籍には、本経に近似する四大龍王の守護を祈願する偈文（我勅提頭頼吒等 慈心擁護受持經～淨於三毒根 成佛道無疑）と、呪文（多姪咤 烏耽毘詈名住山外鬼～欀瞿詈名尾鬼 㮣訶）が見られる。この点から、本経が成立する背景には、『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』が密接に関連しているのが予想できる。この詳細についても、本経の偈文と(d)呪文の背景を考察するところで検討してみたい。

次に、本経の14.～16.に見られる首楞厳三昧入住の功徳（§32）についてである。この部分は、説話の最後にあたるゆえ、⓫～⓬に相当するのが本来であろうが、このような三昧名は、およそ上述してきた典籍のいずれにも確認することができない。これは非常に問題で、既存のウパセーナ比丘説話より摂取されたものではないと言わざるを得ない。この点に関しても、後に詳しく検討してみたい。

以上、本経のウパセーナ比丘説話をめぐる内容構成を検討した結果をまとめると、下のような対照表となる。

ウパセーナ比丘説話対照表

<table>
<tr><th>Upasena</th><th>賢愚経</th><th>雑阿含経</th><th>毘奈耶</th><th>薬　事</th><th>請観陀羅尼</th></tr>
<tr><td></td><td>ⓑ弟・猟師</td><td></td><td>ⓑ</td><td>ⓑ</td><td rowspan="2">1.悪行殺生の罪業</td></tr>
<tr><td></td><td>ⓐ兄・毒蛇</td><td></td><td>ⓐ</td><td>ⓒ善業功徳</td></tr>
<tr><td>①修行</td><td rowspan="6">①～⑥
概略のみ</td><td>①</td><td>①</td><td>①</td><td>1.正念見観音</td></tr>
<tr><td>②毒蛇</td><td>②</td><td>②</td><td>②</td><td>―</td></tr>
<tr><td>③要請</td><td>③</td><td>③</td><td>③</td><td>―</td></tr>
<tr><td>④質問</td><td>④</td><td>④</td><td>④</td><td>―</td></tr>
<tr><td>⑤無分別</td><td>⑤</td><td>⑤</td><td>⑤</td><td>2.～5.諸法空</td></tr>
<tr><td>⑥身霧散</td><td>⑥</td><td>⑥</td><td>⑥</td><td>6.身焼失</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>❼讃歎</td><td>❼</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>❽供養</td><td>❽</td><td></td><td>7.起塔</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>❾報告</td><td>❾</td><td></td><td>(8.)</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>❿偈・呪文</td><td>❿</td><td></td><td>9.～13.呪文・偈</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>⓫述懐</td><td></td><td></td><td rowspan="2">(14.～16.)</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>⓬歓喜</td><td></td><td></td></tr>
</table>

この表を参考に本経における同説話のモデルを検討してみると、諸の特徴に合致する二つの典籍が浮かび上がる。それは、『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』であるが、とくに『根本有部毘奈耶』が本経とよく対応する。いずれにしても、この両典籍が根本説一切有部所属であることからすれば、本経のウパセーナ比丘説話のモデルは、『孔雀経』と同様に、やはり根本説一切有部の典籍にあり、同部派より摂取されたと判断してよいと思われる。

以下より、本経と根本有部の両典籍がどれほど重なり合うのか確認する意味でも、特徴的な数息観と五門禅・偈文・呪文の三点に的を絞って、実際に本文を引用しながら検討を加えてみたい。

(3) ウパセーナ比丘説話に見られる数息観と五門禅の特徴と背景

上述してきたように、ウパセーナ比丘説話を導入する目的は、呪文と数息観、ならびに五門禅によって修行すれば、たとえ過去に悪行をなした者であっても、その

業報を受けることなく、阿羅漢となり般涅槃することができると強調するところにあった。呪文に関しては後述することにして、いまは数息観と五門禅について詳しく検討してみたい。まずは、数息観からである。

本経において数息観を説く箇所は、〈Ⅰヴァイシャーリー治病説話〉における§5・§8～10と、〈Ⅲ六字神呪に基づく内容〉の§21に言及されていた[8]。しかし、そこでは具体的な修行法は説かれず、この〈Ⅳウパセーナ比丘説話〉の中で、ウパセーナが舎利弗より教示され修した数息観として詳述される（§22～24)。ふりかえってみると、§5と§8～10に見られる数息観は、(a)-1帰命句・(a)-2祈願偈・(a)-3呪文を唱える、一種の観音への祈願法とも呼べる修法の中で行うように説かれていた。たとえば、①三宝帰依の三称、②観世音菩薩帰依の三称（以上が(a)-1帰命句に対応)、そして③五体投地、④焼香、⑤西方を向いて一心に気息を整える数息観、⑥勧請((a)-2祈願偈の称誦に対応)、⑦呪文誦持（(a)-3呪文の唱誦に対応）という次第の中で、数息観を行うよう指示されていた。これは、数息観を含む全体的な行次第が指示されたとみることができる。また、§21に説かれる数息観の記述では、観世音菩薩の名号を称え、(c)六字章句の呪文を誦念して数息すること、四十九日間継続する旨が明かされるのみであった。しかし、そこには数息観を含む全体的な行次第が、四十九日間にわたって行われるべきことが指示されていたといえる。

それでは、次の§22～24にかけて、舎利弗より教示され、ウパセーナが修したとされる数息観とはいかなる行法であったのか、具体的に見ていきたい。

『請観音陀羅尼経』§22～24

ⓐ 聞観世音菩薩六字章句正念思惟<u>観心心脈</u>使想一處見観世音菩薩即得解脱成阿羅漢。

ⓑ 云何當得見観世音菩薩及十方佛。若欲得見。<u>端身正心使心不動</u>心氣相續。1.以左手置右手上。2.擧舌向腭令息調匀。使氣不麁不細安祥。3.徐數從一至十成就息念。無分散意使氣不麁。亦不外向不澁不滑。4.如嬰兒飲乳<u>吸氣</u>嗽之。不青不白調和得中。從於心端四十脈下取一中脈。令氣從中安隱得至十四脈中。從大脈生至於<u>舌下</u>。復從舌脈出至於<u>舌端</u>。不青不白不黄不黒。如琉璃器正長八寸。至於鼻端<u>還入</u>心根令心明淨。

ⓒ 佛告諸比丘。此大精進勇猛寶憧六字章句。消伏毒害大悲功徳。観世音菩薩<u>以此數息</u>。<u>心定力故如駛水流</u>。疾疾得見観世音菩薩及十方佛。（大正 vol.20, 36c6-19）

上に引用したⓐ段の記述には、六字章句の(c)呪文を聞き正念思惟し、心と心脈と

を観じて、一処に想って観音を見るなら、解脱し阿羅漢になると説かれている。ⓑ段には、具体的な数息観の行法が説明されている。たとえば、身心を正して心を動ぜず気息を相続させるために、坐法として、1.右手の上に左手を置く。調息法として、2.舌を上顎に向けて息を調える。そして、数息法として、3.ゆったりと一より十になるまで息を数える。4.その数息法は、乳児が乳を飲む際に息を吸うようになし、数えると説明される。その後、脈に関する記述が見られるが、その吸った気息が脈管を通り、最後に舌下より舌端に出て、また鼻端に入っていくよう息を調え、心を明浄になす旨が説かれている。これが、本経における数息観の全体である。ⓒ段では、それによって観音と十方仏を見ることができると結んでいる。

これら1.より4.の内容が、本経の数息観の詳細であるが、実は前項において検討したウパセーナ比丘説話のモデルになったであろう『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』には、数息観に関する記述は一切認められないのである。およそ、初期密教経典の中で、このように具体的な数息観が取り上げられるのは希なことである。この数息観（ānāpāna-smṛti）とは、五停心観（不浄観・慈悲観・因縁観・界分別観・数息観）の一つで、出入の息を数えて散乱した心を静める行法である。おもに小乗の経論に説かれ、主流は小乗にあるが[9]、大乗の経論においても重要視される[10]。一例を挙げれば、佛陀跋陀羅訳『観仏三昧海経』のような念仏三昧経典や、鳩摩羅什訳『坐禅三昧経』[11]、同訳『禅秘要法経』、曇摩蜜多訳『五門禅経要用法』のような「禅定経典」と称される経典群には、本経と同様に、数息観と念仏三昧とが連動して説かれている[12]。また、本経と同時代のころ漢訳された初期密教経典の曇良耶舎訳『観薬王薬上二菩薩経』（漢訳年代 A.D.424～442）では、念仏三昧の一環として、この数息観を修するよう指示されている[13]。こうしていくつかの経典をあげてみると、確かに小乗における数息観が、念仏三昧経典や禅定経典、本経も含めた初期密教経典の中に摂取されてきた経緯が見えてくる。

そこで、問題は、上に引用した本経の§22～24に見られた具体的な数息観がどこより摂取されたか、もしくはどのような経典を背景にしているのか、である。この問題をとくキーワードは、数息観の後に示される「五門禅」と称する禅観法にあると思われる。というのも、数息観のみでは、諸経典において違いを見出すのが困難なため、数息観を含んで修される五門禅の特徴を検討することによって、本経における行法全体の背景が明確になると考えたからである。以下より、本経に説かれる五門禅に関する記述を見てみることにしたい。

『請観音陀羅尼経』§25～27

ⓐ佛告諸比丘汝等善聽。欲服甘露無上法味。若諸比丘已得出家。當自攝身不壞威儀。端坐正受無外向意。觀於苦空無常敗壞不久磨滅。修五門禪當自觀身。從頭至足一一節間。皆令係念停住不散。諦觀衆節如芭蕉樹内外俱空。當知色受想行識亦復如是。

ⓑ佛説是語時。尊者舍利弗。在寒林中還坐樹下。已解佛意端坐正受。…（中略）…至尊者舍利弗所。頭面著地接足作禮。白言尊者。向者如來讚歎數息。以是因緣獲大善利。云何數息唯願尊者爲我解説。眼眼識與色相應云何攝住。耳耳識與聲相應云何攝住。鼻鼻識與香相應云何攝住。舌舌識與味相應云何攝住。意意識與攀緣相應云何攝住。…（中略）…時舍利弗告優波斯那。汝今當觀地大地無堅性。水大水性不住。風大風性無礙。從顛倒有火大火性不實。假因緣生色受想行識。一一性相同於水火風等。皆悉入於如實之際。時優波斯那聞是語已。身如水火得四大定。通達五陰空無所有。殺諸結賊豁然意解。得阿羅漢身中出火。即自碎身入般涅槃。時舍利弗收其舍利。於上起塔已。

ⓒ爲佛作禮白佛言世尊。佛説禪定第一甘露無上法味。若有服者身如琉璃毛孔見佛。觀無明行乃至老死。一一性相皆悉不實。如空谷響如芭蕉樹無堅實。如熱時焰如野馬行。如乾闥婆城如水上泡。如幻如化如露如電。一一諦觀十二因緣成緣覺道。或入寂定琉璃三味。見佛無數發無上心。修童眞行住不退轉。（大正 vol.20, 36c19-37a23）

長文であるが、ⓐ～ⓒ段にわたって五門禅が示されているので引用してみた。内容を見ると、これが観音経典であろうか、はたまた初期密教経典であろうかと疑うほどの小乗的行法の記述が連ねられている。ⓐ段の前半では、苦・空・無常・敗壞・不久磨滅を自身に観ずることを「五門禅」と称している。通常、五門禅といえば、小乗経論に説かれる五停心観（不浄観・慈悲観・因縁観・界分別観もしくは念仏観・数息観）と同義に捉えられるが、本経の場合すべてこれに対応していない。本経の説く五門禅を見ると、ⓐ段の後半では、自身の頭より足にいたる節に心を集中して（不浄観に対応）、諸節（我身）は芭蕉の如く空で、転じて色受想行識の五蘊もみな空である（五蘊皆空）と観想する旨が明かされる。ⓑ段では、六根・六境・六識の十八界も無住であり（諸法空）、地水火風の四大もまた不実であって（四大観）、自身を構成する諸法すべてを空ずる旨が明かされている[14]。この内容は、五停心観のうち、界分別観に対応するようである。ⓒ段では、十二因縁をもって、空・谷響・芭蕉樹・野馬行・乾闥婆城・水上泡・幻などの如くであると観ずることより、琉璃三味および見仏を果たす旨が明かされている。ここは、おもに五停心観のうちの、因

縁観と念仏観に対応するようである。こうしてみると、本経では、数息観が先に示されていたゆえ、五停心観のうち、慈悲観を除く、不浄観・数息観・因縁観・界分別観・念仏観の五観が説かれていたとみなせる。

本経の五門禅の特徴が少分なりとも明確になってきたところで、前項で取り上げたウパセーナ比丘説話のモデルになったであろう『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』の説段⑤の内容、すなわち六根・六境・六大・五蘊などの諸法空を観ずるウパセーナの三昧の境地と、本経の五門禅とを比較してみたい。

『雑阿含経』

優波先那語舍利弗言。若當有言。我眼是我我所。耳鼻舌身意。耳鼻舌身意是我我所。色聲香味觸法。色聲香味觸法是我我所。地界。地界是我我所。水火風空識界。水火風空識界是我我所。色陰。色陰是我我所。受想行識陰。受想行識陰是我我所者。面色諸根。應有變異。我今不爾。眼非我我所。乃至識陰。非我我所。是故面色諸根。無有變異。舍利弗言。如是優波先那。汝若長夜離我我所我慢繫著。使斷其根本。如截多羅樹頭。於未來世永不復起。云何面色諸根。當有變異。（大正 vol.2, 60c25-61a7）

『根本有部毘奈耶』

是時小軍白舍利子言。大徳若於眼耳鼻舌身意有我我所。於色聲香味觸法有我我所。於地水火風空識有我我所。於色受想行識有我我所者。如是之人可使諸根容色變異。大徳。我今不然。於諸根境六界五蘊無我我所。豈使我今容色變異。大徳舍利子。我於長夜所有我我所。我慢執著隨眠煩惱。已知已斷永拔根栽。如斷多羅樹頭不復増長。於未來世不復更生。豈使我今容色變異。（大正 vol.23, 656c19-28）

『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』の両典籍は、ほぼ同内容の三昧の境地を説いているといって大過ないであろう。その趣旨は、ウパセーナが六根・六境・六大・五蘊に対する我我所を離れているから、毒蛇に咬まれた身体に異変が起こらないとの説明を聞いた舍利弗が、ウパセーナが長く我・我所・我慢・繫著を離れ、それらの根本を断じているから、未来世にはそれらへの執着は起こらないであろうと述べることにある。上掲の引用文には、ウパセーナがどのような修行によって、そのような境地に至ったかは説かれていないが、❼段には、梵行と八聖道を修したとされる[15]。この梵行と八聖道を、本経の制作者たちは、小乗の経論や大乗の禅観経典に説かれる五門禅、すなわち五停心観に差し替えたといえる。

そこで、本経の五門禅とよく対応する経論にどのようなものがあるか列挙してみ

ると、上述した類似の数息観を説く経典を検証してみると、念仏三昧経典である『観仏三昧海経』は、不浄観・慈心三昧・因縁観・四大と五蘊の空観と念仏観・数息観を説く。禅定経典の『坐禅三昧経』は、不浄観・慈心観・因縁観・阿那般那（数息）三昧[16]・念仏三昧を説く。『禅秘要法経』は、不浄観・慈心観・因縁観・四大観と五蘊の空観と観仏三昧[17]・数息観を説く。『五門禅経要用法』は、安般（数息観）・不浄・慈心・観縁（因縁観）・念仏を説く。中でも、『坐禅三昧経』の五停心観が本経の五門禅によく対応する。しかし、本経ⓐ段に示された五門禅の五義（苦・空・無常・敗壊・不久磨滅）に着目すれば、『禅秘要法経』の訳語に一致するし[18]、ほかに羅什訳『維摩経』所説の無常・苦・空・無我・寂滅の五義にも近似する[19]。それゆえ、五門禅の観法からすれば、『坐禅三昧経』が本経に最も近い関係にあるといえようが、五門禅において重要な五義からすれば、『禅秘要法経』も密接な関係にあったといえる。おそらく、『坐禅三昧経』も『禅秘要法経』も同一系統の禅定経典ゆえに、本経の数息観と五門禅は、両経を知る者によって複合的に摂取されたと考えられる。

残る問題として取り上げたいのは、本経の最終部分§32〜33に、数息観や五門禅のみならず、「首楞厳三昧」や「観仏三昧海」といったキーワードが記述されているのである。

『請観音陀羅尼経』§32

佛告舍利弗我從過去無量佛所。得聞此句受持讀誦。即得超越八千萬劫生死之罪。又念過去八十萬劫。有佛世尊名一切世間勝。十號具足。彼佛世尊爲我演説如上章句。我即數息使心不散。燿然音解消伏結使。得無生法忍住首楞嚴三昧。（大正 vol.15, 38a2-7）

『請観音陀羅尼経』§33

舍利弗阿難等白佛言。世尊此觀佛三昧海。請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪。所至到處一切吉祥。如梵天王衆所愛敬。（大正 vol.15, 38a12-14）

これほど明確なキーワードが確認できる以上、本経と「首楞厳三昧」や「観仏三昧海」を説く経典との結びつきは極めて深いと言わざるを得ない。とくに数息観と念仏三昧が結合された行法を説く『観仏三昧海経』には、「爲衆行者夢中恒説過去未來三世佛法。説首楞嚴三昧般舟三昧。亦説觀佛三昧[20]」と説かれる部分が認められるので[21]、同じ「首楞厳三昧」や「観仏三昧」を説く本経との結びつきが予想される。成立年代的にみても、東晋佛陀跋陀羅訳『観仏三昧海経』（A.D.411）に対して、本経は竺難提訳（A.D. 419）とみなせるので、両経は漢訳年代もほぼ同時代で

重なり、その成立も同じ四世紀中葉ころまで遡ることができるからである。

成立年代からみて両経に大した差がないため、本経が一連の念仏三昧経典が制作される過程の中で登場した『観仏三昧海経』の影響を受けたとみて大過ないであろう。また、同時代の初期密教経典である『観薬王薬上二菩薩経』においても、同様の記述が見られることは注意を要するであろう。すなわち、念仏三昧経典と初期密教経典との結びつきが本経に限ったものではなく、他にも認められるという点が重要なのである。おそらく、念仏三昧の諸経典が制作される流れの中で、密教的特色をもつ『観薬王薬上二菩薩経』が制作され、本経も同様の過程の中で制作されたとみることができる。

したがって、本経のウパセーナ比丘説話をめぐる文脈構成は、そのモデルになったであろう『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』から、その骨組みが摂取されたであろうが、数息観や五門禅といった具体的な行法の細部に注目すれば、『坐禅三昧経』や『禅秘要法経』といった禅定経典より、この行法が採用されたと見た方が妥当といえる。さらには、本経の念仏三昧との関わりからみると、「首楞厳三昧」や「観仏三昧海」という重要なキーワードが本経に確認できる以上、本経の念仏思想が『観仏三昧海経』や『観薬王薬上二菩薩経』などのいわゆる念仏経典の影響を受けていると考えられるのである。

(4) ウパセーナ比丘説話に見られる偈文と呪文の特徴と背景

次に、ウパセーナ比丘説話に見られる大きな特徴として、§29釈尊所説の四大龍王の偈文と、(d)灌頂吉祥陀羅尼がみられるが、ここではそれらの偈文と呪文をめぐる特徴と背景について検討してみたい。同偈文と(d)呪文は、本経におけるウパセーナ比丘説話のモデルに、『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』を選定した重要な根拠になるものである。まず、本経と根本有部の両典籍所説の偈文を取り上げて、比較してみたい。

本経の以下に引用する偈文は、釈尊が舎利弗に、善男子善女人が観世音菩薩の名号と呪文を受持すれば、ウパセーナ比丘のように重罪や悪業から離れることができると説いた直後に、釈尊がその受持を讃嘆した偈文である。

『請観音陀羅尼経』§29

佛説是語已告舎利弗。我今爲此受持觀世音菩薩名號。消伏毒害無上章句。説偈讃歎

〔v.1〕　我勅提頭頼吒等　慈心擁護受持經　令聞大悲名號人　譬如天子法臣護
〔v.2〕　我勅海龍伊羅鉢　慈心擁護受持經　如護眼目愛己子　晝夜六時不遠離
〔v.3〕　我勅閻婆羅刹子　無數毒龍及龍女　慈心擁護持經者　如愛頂腦不敢觸
〔v.4〕　我勅毘留勒迦王　慈心擁護持經者　如母愛子心無厭　晝夜擁護行住俱
〔v.5〕　我勅難陀跋難陀　娑伽羅王優波陀　慈心擁護持經者　恭敬供養接足禮
〔v.6〕　譬如諸天奉帝釋　亦如孝子敬父母　猶如貧人護財寶　如盲須眼及正導
〔v.7〕　我勅一切諸鬼神　小龍毒蛇毒害獸　一切惡人惡口者　違逆此呪起不善
〔v.8〕　現身白癩膿血流　後墮地獄長夜苦　是故應當慈心護　受持讀誦灌頂句
〔v.9〕　地獄清淨如蓮華　餓鬼破碎無八難　後生佛前入三昧　畢定當得不退轉
〔v.10〕普施一切大安樂　教諸衆生修十地　我從過去無數佛　聞是消伏毒害呪
〔v.11〕消除三障無諸惡　五眼具足成菩提　永與三界作父母　施其安樂得止息

〔v.12〕若有聞我名號者　亦聞大悲觀世音　誦持此呪離諸惡　不墮地獄及畜生
…（中略）…
〔v.19〕護世觀世音　畢定消毒害　淨於三毒根　成佛道無疑（大正 vol.20, 37b5-c16）

上掲のとおり、本経の偈文は、全19偈によって構成される偈文であるが、そのうち、v.1～11にかけては、提頭頼吒（Dhṛtarāṣṭra）・伊羅鉢（Erāpatha）・閻婆羅刹子（Chabyāputta）・毘留勒迦（Virūḍhaka）の四大龍王の他にも、難陀（Nanda）・跋難陀（Upananda）・娑伽羅（Sāgara）・優波陀（Utpalaka）などの八大龍王の四龍、そして鬼神衆らも列挙されて、本経受持者の守護が命じられている。v.12以降は、観音の称名と呪文誦持による毒害の消伏と宗教理想の実現が説かれている。この文脈を見ると、前半の偈文（v.1～11）が、毒蛇に咬まれて死亡した比丘にちなんで釈尊が説いたパリッタ、いわゆる南伝律蔵『小品・蛇呪』[22]を原形にもつ偈文であることが知られる。この『小品・蛇呪』を原形にもつ偈文は、本経のウパセーナ比丘説話のモデルになった『雑阿含経』巻第九「優波先那」[23]、同じく『根本有部毘奈耶』巻第六[24]、ジャータカ『撵度本生物語』[25]、初期密教経典である後漢失訳『安宅神呪経』[26]、曇曜訳『大吉義神呪経』[27]、そして初期密教時代の中盤に属する僧伽婆羅訳『孔雀経』[28]などがある。観音の初期密教経典である本経にも、上に見たように同偈文が導入された背景を考えてみると、本経における全四呪文の総称である「消伏毒害陀羅尼呪」に合致する機能が、そもそも、この原形パリッタの偈文に意義づけられていたことに端を発すると考える。というのも、このパリッタの偈

文は、毒蛇より身を守り、毒を無能にするためのパリッタであったゆえ、これが蛇に咬まれても最後は涅槃の境地に到達したというウパセーナ比丘説話（『Saṃyutta-nikāya』Upasena[29]）と結合されたのである。この結合を見事に図ったのが、『雑阿含経』の「優波先那」説話や『根本有部毘奈耶』巻第六の「小軍」説話といえる。そこで、本経の制作者たちは、「消伏毒害」という観音霊験譚の一例を作成するおり、両典籍のウパセーナ比丘説話を導入したと考えられる。また導入の際、説話の骨子のみならず、同偈文もいっしょに採用したと考えられる。

以下に、本経偈文のモデルとなったであろう『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』の偈文を引用して、比較してみたい。

『雑阿含経』

佛即爲舍利弗而説偈言

〔v.1〕 常慈念於彼　堅固賴吒羅　慈伊羅槃那　尸婆弗多羅

〔v.2〕 欽婆羅上馬　亦慈迦拘吒　及彼黑瞿曇　難徒跋難陀

〔v.3〕 慈悲於無足　及以二足者　四足與多足　亦悉起慈悲

〔v.4〕 慈悲於諸龍　依於水陸者　慈一切衆生　有量及無量

〔v.5〕 安樂於一切　亦離煩惱生　欲令一切賢　一切莫生惡

〔v.6〕 常住蛇頭巖　衆惡不來集　凶害惡毒蛇　能害衆生命

〔v.7〕 如此眞諦言　無上大師説　我今誦習此　大師眞實語

〔v.8〕 一切諸惡毒　無能害我身　貪欲瞋恚癡　世間之三毒

〔v.9〕 如此三毒惡　永除名佛寶　法寶滅衆毒　僧寶亦無餘

〔v.10〕 破壞凶惡毒　攝受護善人　佛破一切毒　汝蛇毒今破（大正 vol.2, 61a26-b17）

『雑阿含経』v.1～2にかけて、堅固賴吒羅（Dhṛtarāṣṭra）・伊羅槃那（Erāpatha）・尸婆弗多羅（Chabyāputta）・欽婆羅上馬（Kambalāśvottara）・迦拘吒（Virūpakṣa?）・黑瞿曇（Kaṇhāgotamaka）・難徒（Nanda）・跋難陀（Upananda）の龍王名が列挙され、無足より多足の有毒のものから、一切衆生が守護されんことを祈願した上で、v.8以降に貪瞋癡の三毒以外の悪毒をも除去せんことが祈願されている。上の欽婆羅上馬・難徒・跋難陀の三龍王を除けば、全10偈の内容は、『小品・蛇呪』と一致する。次の『根本有部毘奈耶』においても、ほぼ同様の内容が確認できる。

『根本有部毘奈耶』

爾時世尊。爲諸苾芻説伽他及禁呪曰

〔v.1〕 我於持國主　及曷羅末泥　緝婆金跋羅　咸悉生慈念

〔v.2〕 喬答摩醜目　難陀小難陀　無足二足等　亦起於慈念
〔v.3〕 於一切諸龍　依水而居者　行住有情類　我悉起慈心
〔v.4〕 一切人天衆　神鬼及傍生　咸皆獲利安　無病常歡喜
〔v.5〕 所見皆賢善　不遇諸怨惡　我悉興慈念　毒害勿相侵
〔v.6〕 我於崖谷險　一切處遊行　齧毒及害毒　常勿相忤嬈
〔v.7〕 世尊大慈父　所有眞實言　我説佛語故　諸毒勿侵我
〔v.8〕 貪欲瞋恚癡　爲世間大毒　由佛眞實語　諸毒自銷亡
〔v.9〕 貪欲瞋恚癡　爲世間大毒　由法眞實語　諸毒自銷亡
〔v.10〕 貪欲瞋恚癡　爲世間大毒　由僧眞實語　諸毒自銷亡
〔v.11〕 滅除諸毒害　擁護而攝受　佛除一切毒　蛇毒汝銷亡（大正 vol.23, 657a 23-b15）

『根本有部毘奈耶』v.1～2にかけて、持國主（Dhṛtarāṣṭra）・曷羅末泥（Erāpatha）・緝婆（Chabyāputta）・金跋羅（Kambala）・喬答摩（Gotamaka）・醜目（Virūpakṣa）・難陀（Nanda）・小難陀（Upananda）といった龍王名が挙げられ、無足・二足の有毒のものから、一切衆生が守護されんことを祈願した上で、v.8以降に貪瞋癡の三毒以外の諸毒害をも除去せんことが祈願されている。やはり、この『根本有部毘奈耶』の偈文においても、『小品・蛇呪』と一致する内容が見られる。この二点から、根本有部に所属する『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』におけるウパセーナ比丘説話の偈文が、『小品・蛇呪』より摂取された背景が読み取れる。それと同時に、本経§29の偈文が、これら根本有部の両典籍より増広を加えながら、摂取されたことが推測できる。

次なる問題は、本経の偈文の後に説かれる(d)灌頂吉祥陀羅尼である。先の本経の偈文は、モデルとなった『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』の偈文より、観音への救済祈願部分（v.12～19）が増広されていたが、この(d)呪文に関しては、三典籍の間でほぼ一致するのである。以下に、本経を含めた三典籍の呪文を並べて引用、比較してみたい。

・『請観音陀羅尼経』§29、(d)灌頂吉祥陀羅尼

[1]多姪咤 [2]烏 [3]耽毘詈[名住山外鬼] [4]兜毘詈[名住山窟鬼] [5]耽堺[名爛目鬼] [6]波羅耽堺[名食殘果鬼住一切果樹下食殘] [7]捺吒 [8]修捺吒[名好偸鬼] [9]枳跋吒[名殺魚鬼] [10]牟那耶[名出家鬼] [11]三摩耶[名三昧鬼] [12]檀提[名捉杖鬼] [13]膩羅枳尸[名好髮女鬼] [14]婆羅鳩卑[名住破肌鬼] [15]烏詈[名瓔鬼] [16]懐瞿詈[名尾鬼] [17]娑訶（大正 vol.20, 37c20-24）（還梵：[1]tadyathā [2]oṃ [3]tumbile [4]tubile [5]tumbe [6]pratumbe [7]naṭṭe [8]sunaṭṭe [9]kebaṭṭe [10]munaye [11]samaye [12]dante [13]nīlakeśe [14]bālakobe [15]ole [16]nyaṅgole [17]svāhā.）

・『雑阿含経』

[1]所謂 [2]塢 [3]躭婆隷 [4]躭婆隷 [5]航陸 [6]波婆躭陸 [7]榛涕 [8]肅榛涕 [9]抭跋涕 [10]文那移 [11]三摩移 [12]檀諦 [13]尼羅枳施 [14]婆羅拘閇 [15]塢隷 [16]塢娛隷 [17]悉波呵（大正 vol.2, 61b17-22）

（還梵：[1]tadyathā [2]oṃ [3]tumbale [4]tumbale [5]tumbe [6]pratumbe [7]naṭṭe [8]sunaṭṭe [9]kebaṭṭe [10]munaye [11]samaye [12]dante [13]nīlakeśe [14]bālakobe [15]ole [16]ogole [17]svāhā.）

・『根本有部毘奈耶』

[1]怛姪他 [2]菴 [3]敦鼻麗 [4]敦鼻麗 [5]敦薜 [6]鉢利敦薜 [7]榛帝 [8]蘇榛帝 [9]雞榛帝 [10]牟柰裔 [11]蘇牟柰裔 [12]彈帝 [13]尼攞雞世 [14]遮盧計薜 [15~16]嗢毘盈具麗 [17]莎訶（大正 vol. 23, 657b16-19）

（還梵：[1]tadyathā [2]oṃ [3]tumbile [4]tumbile [5]tumbe [6]pratumbe [7]naṭṭe [8]sunaṭṭe [9]kenaṭṭe [10]munaye [11]sumunaye [12]dante [13]nīlakeśe [14]cārukebe [15~16]ovinyaṅgole [17]svāhā.）

Tib. : [1]tadyathā [2]oṃ [3]tumbile [4]tumbile [5]tumbe [6]pratumbe [7]naṭṭe [8]sunaṭṭe [9]kebaṭṭe [10]munaye [11]samaye [12]dante *dantile nīle* [13]nīlakeśe *bāle* [14]bālakobe [15]ole [16]nyaṅgole [17]svāhā.（D. No.3, Ca, 126b2-3）

上に引用した三典籍のうち、本経の(d)呪文に最も近似するのは『雑阿含経』であろうが、三典籍すべての呪文の間に大きな相違は認められない。実は、これほど呪文が合致するのは希なことなのである。したがって、この比較結果よりいえることは、本経の(d)呪文が、『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』所説の同一系統呪文を摂取したことが決定的となる。この結果は非常に重要である。というのは、(d)呪文がこれほど一致するということは、間違いなく本経のウパセーナ比丘説話の偈文も、ひいては同説話そのものが、両典籍より摂取され可能性に信憑性が出てくるからである。たとえ、本経に禅定経典や念仏経典を背景にしていた部分があったにしても、このような(d)呪文の一致は、本経成立の問題を考える場合、決定的である。この結果より、本経のウパセーナ比丘説話は、根本説一切有部所属の者たちによって作成されたであろうことが導き出されるのである。根本説一切有部とまったく無関係の者たちが、このような摂取を行う余地がどこにあるであろうか、必ず同じ部派に属する者が導入したと考えるのが妥当ではないだろうか。

まとめ

以上、〈Ⅳウパセーナ比丘説話に基づくストーリー〉における本経の特徴と背景

をまとめてみると、以下の六点が浮かび上がる。

〔1〕　ウパセーナ比丘説話を本経に導入する目的は、呪文と併せて数息観と五門禅によって修行すれば、たとえ過去に悪行を犯した者であっても、ウパセーナ比丘のように、その業報を受けることなく、宗教理想を実現できることを強調するところにあった。

〔2〕　本経のウパセーナ比丘説話をめぐる文脈構成を検討した結果、諸の特徴に合致する二つの典籍が浮かび上がる。それは、『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』である。この両典籍は、いずれも根本説一切有部に属することから、本経のウパセーナ比丘説話のモデルは、『孔雀経』と同様に、根本説一切有部の典籍であり、同部派の典籍より摂取されたと判断してよい。

〔3〕　本経のウパセーナ比丘説話をめぐる文脈構成は、〔2〕のように『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』から、その骨組みが摂取されたであろうが、具体的な行法である数息観や五門禅に関しては、『坐禅三昧経』や『禅秘要法経』といった禅定経典より採用されたとみられる。

〔4〕　さらに、本経の念仏三昧の特徴からみる場合、「首楞厳三昧」や「観仏三昧海」という念仏三昧に関わるキーワードが本経に確認できるので、本経の念仏思想は『観仏三昧海経』や『観薬王薬上二菩薩経』など、いわゆる念仏三昧経典から影響を受けたと考えられる。

〔5〕　本経の四大龍王の守護を始めとする偈文は、パリッタ『小品・蛇呪』より摂取した『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』におけるウパセーナ比丘説話の偈文より、観音への祈願偈を増広させながら摂取されたとみなせる。

〔6〕　本経の(d)呪文は、『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』所説の呪文とほとんど一致するため、両典籍所説の呪文より摂取されたとみなせる。

これら六項目におよぶ〈Ⅳウパセーナ比丘説話に基づくストーリー〉における特徴と背景を考えてみると、Ⅳ段の思想的特徴は、見仏と涅槃といった宗教理想を実現させるに必要な消伏毒害と滅罪を、どのような方法で実現させるかにあったといえる。その方法を実現させるため、観音霊験譚を採用したわけであるが、その観音霊験譚を創作するモデルに採用したのが、とりもなおさず『雑阿含経』と『根本有部毘奈耶』のウパセーナ比丘説話であったといえる。そのストーリーの骨子のみならず、偈文や呪文においても両典籍がモデルになっていたことは、いまや明白である。そして、本経における数息観・五門禅・念仏思想等の具体的行法に関わるキーワードに関しては、伝統的な禅法を伝える『坐禅三昧経』や『禅秘要法経』に見ら

れる小乗以来の禅法、また『観仏三昧海経』や『観薬王薬上二菩薩経』における念仏法の影響が考えられた。

これらの特徴と背景より、本経の〈Ⅳウパセーナ比丘説話に基づくストーリー〉は、何よりも根本説一切有部に所属する者たちによって作成されたであろうことが導き出されたのである。

参考文献と略号一覧

- 大塚（2004）：大塚伸夫「最初期密教の実態 ―『孔雀明王経』を中心として―」（『大正大学研究紀要』第89輯、pp.284 - 308）
- 佐和（1943）：佐和隆研「十一面観音の表現に就いて」〔『密教研究』第84号、高野山大学密教研究会、1943、pp.57-79（再録「十一面観音の表現と展開」『佐和隆研著作集密教美術論』第1巻、法蔵館、1997、pp.136-157）〕
- 佐和（1950）：佐和隆研「観世音菩薩の展開」〔『仏教芸術』第10号、毎日新聞社、1950、pp.47-73（再録『佐和隆研著作集密教美術論』第1巻、法蔵館、1997、pp.102-135）〕
- 添田（1931a）：添田隆俊「不空羂索経の成立に就いて」（『密教研究』第40号、高野山大学密教研究会、1931、pp.97-146）
- 添田（1931b）：添田隆俊「不空羂索経の成立に就いて（其の二）」（『密教研究』第42号、1931、pp.101-121）
- 沼田（1998）：沼田一郎「波羅夷殺戒の一解釈 ―『根本説一切有部毘奈耶』の〈Upasena 物語〉について―」（『日本仏教学会年報』第64号、1998、pp.61-70）
- 山田（1976a）：山田耕二「十一面観音菩薩の成立」（『東海仏教』第21輯、東海印度学仏教学会、1976、pp.13-31）
- 山田（1976b）：山田耕二「〈不空羂索呪経〉の成立について」（『密教学研究』第8号、日本密教学会、1976、pp.32-51）

註

（1）『出三蔵記集』大正 vol.55, 22b22.

（2）『衆経目録（法経録）』巻第一、大正 vol.55, 116c5.

（3）『開元録』大正 vol.55, 509a8-15.

（4）本経における五門禅の五義は、小乗の五停心観や四念処観というより、羅什訳『維摩経』所説の無常・苦・空・無我・寂滅の五義に近似する。『維摩経』には支謙訳・羅什訳・玄奘訳の三漢訳、ならびに梵本とチベット訳の諸本がある。そのうち、最も早期と思われる支謙訳（大正 vol.14, 522c14-22）には、無常・苦・空・非身（無我）の四義しか見られず、寂滅を欠く。梵本（VKN, Ⅲ-§25～26）とチベット訳（D. No.179, 188a5-b3）も四義を説き、項目は無常・苦・無我・寂滅となっており、空義を欠く。一方、羅什訳（大正 vol.14, 541a12-21）と玄奘

訳（大正 vol.14, 563a10-23)にいたっては、無常・苦・空・無我・寂滅の五義すべてが見られる。それゆえ、本経の五門禅に見られる五義は、 本経の訳出年代（A.D. 419)からして、羅什訳（A.D. 406)『維摩経』の原典に基づく可能性が考えられる。

（5）細滑とは、感官によって接触されるものを指し、『義足経』(大正 vol.4, 186c)、『那先経』(大正 vol.32, 712ab)、『成具光明定意経』(大正 vol.15, 451)などに見られる。

（6）大塚（2004)参照。

（7）本文に列挙した文献は、主に沼田（1998)を参照した。また、ウパセーナと名のる比丘は、この他にも『Mahāvastu』II, 56-67（舎利弗と目連の出家説話のうち、彼らに縁起の法を説き、出家のきっかけを作った仏弟子ウパセーナに関する内容)、同 III, pp.424-432（カーシャパ三兄弟の出家説話のうち、彼らの母方の叔父で、聖仙ウパセーナの出家に関する内容)、また『仏本行集経』優波斯那品第四十五（大正 vol.3, 851a15- 856a24)などがあるが、これらは本経のウパセーナ比丘説話と直接の関係がないので、ここでは紹介するにとどめた。

（8）『請観音陀羅尼経』§5「時世尊告長者言。去此不遠正主西方。有佛世尊名無量壽。彼有菩薩名觀世音及大勢至。恒以大悲憐愍一切救濟苦厄。③汝今應當五體投地向彼作禮。④燒香散華⑤繫念數息。令心不散經十念頃。⑥爲衆生故當請彼佛及二菩薩（大正 vol.20, 34c5-10)」、§8～10「①汝等今者應當一心稱。(a)-1南無佛南無法南無僧。②南無觀世音菩薩摩訶薩。大悲大名稱救護苦厄者。如此三稱三寶。三稱觀世音菩薩名。④燒衆名香③五體投地。⑤向於西方一心一意令氣息定。(a)-2⑥爲免苦厄請觀世音。合十指掌而説偈言…(中略)…(a)-3⑦我今當説十方諸佛救護衆生神呪…（大正 vol.20, 34c16-35a15)」、§21「稱觀世音菩薩名號。⑦誦念此呪數息係念。無分散意<u>經七七日</u>（大正 vol.20, 36a 19-20)」

（9）小乗の経論に数息観を説くものとして、たとえば『雑阿含経』巻第二十九、『増一阿含経』巻第一、『倶舎論』巻第二十二、『大毘婆沙論』巻第二十六、『大安般守意経』巻上などがある。

(10) 大乗の経論に数息観を説くものとして、たとえば『瑜伽師地論』巻第二十七、『大智度論』巻第十、『大集経』巻第四十八などがある。

(11)『坐禅三昧経』は鳩摩羅什などによる中国撰述と思われるが、翻って、禅法に関して言えば、本経は当時のインド修行者たちが行っていたであろう実際の禅法をよく伝えた文献であるとみなせる。

(12)『坐禅三昧経』「第四治思覺法門」～「第五治等分法門」(大正 vol.15, 273a12-277b9)、『禅秘要法経』巻下「爾時當教行者而作是言。汝所見者。雖是多佛及諸聲聞。汝今應觀此諸世尊。是無相身。是大解脱。是無學果。應當善攝汝心。如前數息（大正 vol.15, 265b20-22)」、『観仏三昧海経』念十方仏品第十一「如是坐時。入深禅定無量境界諸三昧海。但於心中。出息入息念念想想相続不絶（大正 vol.15, 695b1-3)」、『五門禅経要用法』「坐禪之要法有五門。一者安般。二不淨。三慈心。四觀縁。五念佛（大正 vol.15, 325c11-12)」

(13)『観薬王薬上二菩薩経』「爾時藥上菩薩。説是偈已還復本座。佛告大衆。佛滅度後若有衆生。繫念思惟觀藥王菩薩者。當作五想。一者繫念<u>數息</u>想。二者安定心想。三者不出息想。四者念實相想。五者安住三昧想。佛告彌勒。若善男子及善女人。修此五想者。於一念中即便<u>得見藥王菩薩</u>。是藥王菩薩身長十二由旬（大正 vol.20, 662b20-26)」

(14) ちなみに『大日経』住心品における三劫段の第一劫に、聚沫・浮泡・芭蕉・陽焔・幻等の五喩を観じて、「唯蘊無我」なる五蘊の空を解了し、さらには進んで蘊処界の十八界の諸法無

我を解了して、涅槃を意味する「寂然界」を証する小乗の悟りが説かれているが（大正 vol.18, 3a29-3b9)、本経の五門禅の場合もこれに対応すると思える。

(15)『雑阿含経』大正 vol.2, 61a11-19、『根本有部毘奈耶』大正 vol. 23, 657a3-12。

(16)『坐禅三昧経』に見られる数息観は、本経の五門禅の構成によく対応する。「息者是風。與外風無異。地水火空亦復如是。是五大因縁合故生識。識亦如是非我有也。五陰十二入十八持亦復如是（大正 vol.15, 275a23- 26)」

(17)『禅秘要法経』と『観仏三昧海経』に見られる四大観と五蘊空観と観仏三昧との関係は、本経に近似するが、両経ともに空観が十八界の諸法までに及んでいない点が本経と相違する。『禅秘要法経』「皆從五陰四大而生。五陰無主。四大無我。性相俱空。何由而有。作是觀時。智慧明顯（大正 vol.15, 258b8-9)」、『観仏三昧海経』「如我身者。四大五陰所共合成。如芭蕉樹中無堅實。如水上沫。如水中月。如鏡中像。如熱時焔如野馬行。如乾闥婆城。作是想已諸像尋滅有金色光。於金光間有金佛影。如鏡中像。行住坐臥四威儀中現一切色。此想成時當念如來戒身（大正 vol.15, 692b23-28)」

(18)『禅秘要法経』「演説若空無常無我。亦説此身是敗壊法。不久當滅。」大正 vol.15, 250b27.

(19) 注(4)に前述したように、『維摩経』には、支謙訳・羅什訳・玄奘訳の三漢訳、ならびに梵本とチベット訳の諸本がある。そのうち、最も早期と思われる支謙訳（大正 vol.14, 522c14-22)には、無常・苦・空・非身（無我)の四義しか見られず、寂滅を欠く（この四義は、不浄観・数息観・慈念観を説く『修行動地経』とも一致する。大正 vol.15, 212a11-29参照)。また、梵本（VKN, Ⅲ-§25～26)とチベット訳（D. No.179, 188a5-b3)も無常・苦・無我・寂滅の四義のみを説き、空義を欠く。一方、羅什訳（大正 vol.14, 541a12-21)と玄奘訳（大正 vol.14, 563a10-23)にいたっては、無常・苦・空・無我・寂滅の五義すべてが見られる。それゆえ、本経の五門禅に見られる五義は、本経の訳出年代（A.D. 419)からして、羅什訳『維摩経』(A.D. 406)の原典に近いといえる。

(20)『観仏三昧海経』大正 vol.15, 666a4-5.

(21) この点からすれば、『観仏三昧海経』は、『首楞厳三昧経』や『般舟三昧経』が成立した後に制作されたと思われる。『首楞厳三昧経』は、古くは支婁迦讖訳（A.D.185)の初訳二巻本が存在したと伝えられるが現存せず（『出三蔵記集』「首楞厳経二巻(中平二年十二月八日出今闕)」大正 vol.55, 6b11.)、鳩摩羅什訳（A.D.397～418)が現存する中で最古訳となる。また『般舟三昧経』も支婁迦讖訳（A.D.179)であるから、その成立はかなり古い。一方、『観仏三昧海経』は、東晋仏陀跋陀羅訳（A.D.411)ゆえ、おおむね『般舟三昧経』や『首楞厳三昧経』が成立した後の制作とみてよいであろう。

(22) Ahi-paritta (Vinaya-piṭaka, vol.II, Cullavagga, V-No.6, pp.109-110 =南伝 vol.4, pp.168-170)

(23)『雑阿含経』大正 vol.2, 61a25-b17.

(24)『根本有部毘奈耶』大正 vol.23, 657a23-b15.

(25) Khandhavatta-jātaka (Jātaka, vol.II, No.203, pp.144-148 = 南伝 vol.30, pp.242-246)

(26)『安宅神呪経』大正 vol. 21, 911c17-27.

(27)『大吉義神呪経』大正 vol. 21, 569c3-24.

(28) 僧伽婆羅訳『孔雀経』大正 vol.19, 447b7-c9.

(29) Saṃyutta-nikāya, partIV, Migajāla-vagga, No.69, pp.40-41=南伝 vol.15, pp.64-66

＜キーワード＞　観音、ウパセーナ、呪文、数息観、五門禅